

〔研究論文〕

**国際学部生はいかに地域で学び、いかに地域に貢献可能か  
——「あだち学」検討プロジェクトの調査報告**山田修嗣<sup>1</sup>、海津ゆりえ<sup>2</sup>、小林勝法<sup>3</sup>、渡邊暁子<sup>4</sup>

〔Article〕

**Exploring Potential Learning and a Possible Contribution by Students of  
the Faculty of International Studies for the Local Community  
– A Brief Report on a Research Project for Establishing “Adachi Studies”**Shuji YAMADA Yurie KAIZU  
Katsunori KOBAYASHI Akiko WATANABE**Abstract**

Both experiential and practical learning are important for students of the Faculty of International Studies. In particular, it is expected that students will “know” the reality of society, “relate” with local people and “develop” themselves through the learning process. In this regard, our Faculty has been providing many chances for students to learn practically utilizing good collaborations with local organizations based on the Shonan Campus.

However, after 2021, it will be a big challenge to keep organizing possibilities for students’ practical learning around our new campus.

This is a brief report on our project carried out for the purpose of launching the foundation of experienced based learning near the Tokyo Adachi campus. Our survey was conducted from the following four perspectives: “open community”, “sports”, “coexistence” and “participation”. The goal to establish an image of “Adachi studies” and forming a local network were examined. From the above perspectives, it was found that there is a high possibility and there are benefits for setting students’ practical learning in the local society. At the same time, a fruitful contribution to the community and a big responsibility of our faculty were also confirmed.

**1. 本稿の概要と調査課題**

本稿は、2019年度の本学学長調整金を受けて実施した、「国際学部における体験的・実践的教育プログラムとしての『あだち学』の開発：予備調査編」の事例報告である。同プロジェクトでは、本稿執筆者が、国際学部の東京あだちキャンパス移転(2021年度)以降、地域連携を前提とした学生

---

1 文教大学国際学部教授(1、5、6節執筆)  
2 文教大学国際学部教授(2節執筆)  
3 文教大学国際学部教授(3節執筆)  
4 文教大学国際学部准教授(4節執筆)

の教育プログラムを実施することが可能か、その可能性を求め予備(現地)調査を行った。これは、2020年度までに培われた茅ヶ崎市と本学部との連携が、講義・ゼミ・実習の形で、学生の体験的・実践的学びに多面的にいかされていることを土台とし、これと同様の学びがあだちキャンパスでも実現可能かを調べるプロジェクトである。あだちキャンパスでも学生が地域を「知り」、地域の人々と「かかわり」、地域とともに「成長する」仕組みを構築したいと考え、その基礎を作る目的で調査を行った。

同プロジェクトは、本学部の「あだち学」のイメージ形成と、現地ネットワーク形成の2点を到達点とした。イメージ形成とは、1. あだち学にむけた地域情報の蓄積、2. 学生とともに学ぶべき地域活動の情報収集、3. 前2項に必要な情報提供者の照会を進め、「あだち学」の基礎的なコンテンツを集めるものである。もう1つのネットワーク形成とは、足立区役所の関係各課を主要な対象と考えつつ、同区の仲介を得て、当該地域の組織・機関や市民活動団体との関係を構築するものである。

筆者らが目指している「あだち学」とは、体験的・実践的学びの学生への提供を通して、今後の学部教育に役立つ仕組みを含む、大学側から地域を表現し構想する学問的体系である。グローバル化した社会で活躍する学生の育成に、地域からの実践で応え、また、手を取り合う地域社会にむけては、多様な地域資源や社会的資源が再認識・再確認され、地域らしさを共有するといった具合に、学びにもとづく相乗効果をともなう体系を想定している。

本稿はこの検討課題にたいし、次節以降、次の論点により事例報告を行う。まず、「地域資源」にもとづく学びから「まちびらき」へとした2節では、学生がかかわる交流からいかに「まちびらき」が可能となるかを、筆者自身の宝さがしから構想する。つづく3節は、「スポーツ」にもとづく集まりや学びを前提に、本学と学生が地域との関係構築を進めながら成立させる第3の居場所機能の可能性について検討する。4節では、「多言語・多文化共生」にもとづく学びから導かれる学生活動が、どのように地域の時間と空間の軸に影響し、その発展的变化により互酬的仕組みとなるか、その道筋を議論する。5節は、「市民参加とまちづくり」にもとづく学びが提示する学生の地域参加が、変化の触媒となって、地域の新たな価値を結晶化する過程となりえる点を、地域の期待感とともに紹介する。最後の6節で、同プロジェクトの要約とあだち学への含意を抽出して、本稿のまとめとする。

## 2. 「地域資源」にもとづく学びから「まちびらき」へ

### 2-1. あだち学の構築に向けた筆者のアプローチ

筆者(海津)は観光とくにエコツーリズムを専門としている。エコツーリズムとは、資源を守りながら活かす観光の考え方であるが、とくに重視していることは足元に眠る資源の掘り起こしである。気づかない、見過ごしてしまいがちな足元の資源に改めて光を当てることで価値を見出し(「宝探し」と呼ぶ)、そのことから生まれる誇りを動力源として訪れる人に伝え、対話や交流が生まれることによって地域の持続的な発展への活力を得る。この一連のプロセスを実践することに意義を感じ、学生たちにも身につけさせようと日々模索している。筆者はこの考え方を以て「あだち学」の構築に取り組むこととした。「あだち学」の先には、花畑を起点とした地域資源によって、「まちびらき」を実現し、新たな交流がうまれることを思い描いている。

### 2-2. 調査の視点と手法

観光とは、観光者が地域を訪れ、その地にある風物や人、知恵などにふれることである。筆者は

足立区初心者であるから「足立区とは何か」という初歩的な問いからアプローチすることとし、空間構造(地形や土地利用、景観)、毛長川、伝えること、の3つの視点で情報収集を行った。

調査手法は市シティプロモーション課へのヒアリングと足立区立郷土博物館見学(いずれも2020年2月12日)および現地調査(2015年10月、2020年2月)、文献調査である。本来は複数回にわたる調査を実施する予定であったが、新型コロナウイルスの感染拡大の影響により調査は途上である。

## 2-3. From : 把握した「あだち」情報

### (1) 空間構造

足立区は東京都北東部に位置し、面積では23区3位を誇り(53.25km<sup>2</sup>)、人口は5番目(約68万人)の平坦で広大な土地である。縄文海進の時期には伊興遺跡あたりまで海であり、出土品から、この辺りは港として西日本との航路の起点となっていたことがわかっている。その後、河川が運ぶ土砂が徐々に下流域に堆積し、現在の足立区が形成されていった。区域は東を中川、西から南を荒川、隅田川が流れ、北には綾瀬川に注ぐ毛長川が流れる。水系が縦横に走り、その水が潤す大地は肥沃で、江戸を支えた野菜の生産基地を形成した。北千住はその野菜の流通拠点「やっちゃ場」で栄えた。平らな土地には公園も多く、都立公園、区立公園などの都市公園面積は23区で最も広い。区内は南北方向に4本の鉄道(常磐線、つくばエクスプレス、東武スカイツリーライン、日暮里・舎人ライナー)が走っているが、東西の連絡は良いとは言えない。

文教大学東京あだちキャンパス予定地である花畑地区は、足立区の北部にあり、毛長川を挟んで埼玉県草加市と接する。インフラが整っていなかった足立区では、昭和30～40年代に国が進めていた公団住宅開発に乗り、都の整備予定住宅の20%を受け入れた。新キャンパスが予定されている花畑地区もこの一環に属する。住宅整備として一定の年限が経過したことから、これらの宅地エリアは建て替え時期を迎えた。跡地利用として本学がキャンパスを建てることになったのである。「足立区は空が広い」と言われることがあるが、それはこの時代の公団住宅が5階建程度の低層住宅が多かったことに起因する。

足立区を大まかに区分するには、南北に走る日光街道と国道環状7号線が手がかりとなる。南部の宿場町であり「やっちゃ場」がある千住エリア、縄文期から人が住み、古墳も点在する西部の舎人や伊興エリア、工場が立ち並ぶ東部の綾瀬、住宅地を率先して受け入れた北部の花畑や保木間エリ



写真1 旧日光街道の日常風景(2015)



写真2 公団住宅(花畑団地)(2020)

アなどに分かれる。なお東側は日立などの工場があったため、戦時中に爆撃を受け、戦後に区画整理を受けている。足立区内において北千住は別格といえる。江戸市中の食を支えた千住市場は、野菜のみならず祭りの道具や皮革、ランドセルや靴などの生活必需品の流通拠点として人々の生活を支えてきた。また、松尾芭蕉の『奥の細道』の起点も足立区北千住である。

足立区は、江戸・東京との関わりを通じて、様々な生業や人の手技を生んできた。「広報あだち」(2020年2月10日号)では鉄鍛冶職人の川澄巖と江戸刺繍師の竹内功を紹介している。一人の名工が一つの技を伝える職人技は、都市との繋がりがあってこそ生まれたものである。

## (2) 毛長川

足立区は今でこそ内陸にあるが、縄文時代には沿岸域にあり、縦横に走る水系の治水・利水をしながらい今日の区域を形成してきた地域である。有名な利根川東遷、荒川東遷などをへて現在の河川の流路に落ち着いていると言ったほうが良い。キャンパス予定地の北辺を流れる毛長川を支流とする中川・綾瀬川圏域は、利根川、江戸川、荒川に囲まれた流域面積987km<sup>2</sup>の低平な流域である。この流域は利根川、荒川が氾濫することにより形成された低湿な氾濫原および関東ローム層の武蔵野面を冠す台地から構成されている。この東部低地帯は、古くから河川の乱流により形成された沖積層の低地帯であり、沖積層と呼ばれる軟弱な土砂が厚く堆積しており、過去たびたび洪水や高潮の水害に見舞われてきた。さらに、明治以降に産業の発展に伴って、地下水の汲み上げが盛んに行われ、その結果地盤沈下を誘発(昭和50年代まで)して、災害に対して極めて弱い地域となった。戦後は工場誘致による水質悪化し、平成に入ってから護岸工事と周辺の宅地化が進んでいる。



写真3 毛長川



写真4 浅間神社

## (3) 花畑の歴史

花畑地区は、花又村・六木村・内匠新田・久左衛門新田・辰沼新田・久衛門新田・長左衛門新田・嘉兵衛新田の合併(明治22年)による旧「花畑村」である。1592-1644年間の利根川東遷、荒川西遷により河川流量が減少し、開発が進んだ。花畑地区は江戸時代～明治時代にかけて数多くの寺子屋、家塾を開業した教育熱心な土地である。実性寺が中心であった。牧野隆幸塾(高山市出身)は500名を輩出している。江戸～明治初年にかけて算学(和算)が盛んに教えられ、特に金杉清三郎が著名である。これは物資の集散地であり商売上の必要があったことが理由と考えられる。

花畑エリアの主要資源として、西の市発祥地である大鷲神社、富士塚を持つ浅間神社がある。大

鷲神社にはかつて「鷲宿」があり、市を立てて灰を販売するなど江戸との交易拠点であった。

#### (4) 伝える場と活動

足立区立郷土博物館は、足立区の発展史および地域の特性に関する情報の集積と発信を担う拠点であるが、ここに事務局をおく「足立史談会」は、特に東郊地域の歴史文化の研究や区民との共有を図る組織として重要である。今後の足立区のまちあるきを進めていく上でこの組織との連携を結ぶ必要があると考える。

#### 2-4. For : 「あだち学」へのヒント

以上、概況把握のレベルではあるが、資源調査を踏まえて把握された足立区および花畑地域の地域特性について述べた。これらを題材に、「あだち学」への展開のヒントを検討してみたい。現時点において足立区あるいは花畑地区を捉える視点として、次の4つのアプローチが考えられる。あだち学を通してどのような風景を描き出すことができるかという展望から「景」という共通キーワードで整理する。個々の内容については、今後「あだち学」を通して掘り起こし、深めていくことになる。

- ① 地の景—エリアごとに異なる多様な形成史
- ② 都の景—江戸・東京との関わりにおける足立区のポジショニング
- ③ 水の景—多数の河川の治水と利用、水系がつなぐ多様な文化
- ④ 人の景—上記の足立区の来歴が生み出してきた人の技や足跡、生業

#### 2-5. With : とともに学び、研究する

地域名に学をつける<○○学>は、赤坂憲雄が遠野で始めた「東北学」や吉本哲郎らが熊本県水俣市で始めた「地元学」にルーツを求めることができる。吉本(2008)は、著書の中で地元学について次のように述べている。

「水俣病のことを外の人たちが調べてくれた。でも、住んでいる私たちは詳しく知らなかった。だから、下手でもいいから自分たちで調べて行こう。まず自分たちで調べて、どうしてそうなのか考え、今に役立てて行こう。そのためにはまず自分たちで調べないとだめだ。自分たちのことは自分たちでやるという自治する力を根本に据えないかぎり、持続的な取り組みは不可能だ。」

水俣市という過去に生じた公害による負の遺産を抱える地域で、改めて地域の力を問い、表に出すことで地域を再認識し、未来のまちづくりの基本的な力とすること、それを継続することが地元学というものと言える。水俣市は、地元の人々で「まちあるき」を繰り返し、「あるもの探し」(ないものねだりの対語)を行うことで自意識を醸成していった。

「あだち学」を地元学のあだち版として考えれば、その進め方は<知る→表す→発表・議論する→活用する>の繰り返しであり、これらの作業を足立区の方々と一緒に進めることである。その過程で仲間がふえ、運動が広がり、明日を創るヒントを見出していく。これは大学で日々実践している授業や演習に他ならない。筆者は「あだち学」は「まちびらき」を一つの通過的ゴールと考えており、そのためには、まず国際学部と学生・教員は「大学びらき」を行い、地域づくりの一端を担う大学という姿勢で臨むことが肝心である。キャンパスを離れて、まちなかで授業やゼミを開催する「まちゼミ」の開講も考えられる。地域づくりには終わりがなく、始めたらやめることはできない。やめないための仕掛けや仕組み、仕切りをいかに構築するか。「あだち学」を始動させる者の役割は大きい。

### 3. スポーツにもとづく学び

#### 3-1. あだち学の構築に向けた筆者のアプローチ

新型コロナウイルス感染症の拡大により自宅での勤務や学修が増え、ライフスタイルが大きく変容した。そこで、3rd プレイスが改めて注目されるようになった。3rd プレイスとは、1st プレイス(自宅)や2nd プレイス(職場や学校など)に次いで、多くの時間を過ごす場所のことで、地域のコミュニティライフの場所である<sup>5</sup>。内閣府が2020年5月に行った調査<sup>6</sup>によれば、新型コロナウイルス感染症の影響により、通勤時間が減少し、家族と過ごす時間が増加している。就業している人のうち50.0%が「生活を重視するように意識が変化した」と回答し、「社会とのつながりの重要性をより意識するようになった」との回答は39.3%であった。感染が終息してもこのような状況が常態化し、地域コミュニティが活性化すると予想される。

文教大学は、足立区花畑団地の一角に建設され、同地区のコミュニティに新たに仲間入りする。スポーツ施設やホール、食堂など様々な施設を有しており、キャンパスを囲う塀がなく、芝の遊休地もあるので、地域住民の3rd プレイスとなり得るであろう。また、スポーツや祭りなどの地域イベントに学生が参加し、街の活性化に寄与すると共に、大学が地域コミュニティの一員としての責任を果たしたいと考えている。

#### 3-2. 調査の視点と手法

足立区、特に花畑地区のスポーツと芸能に関する資源、つまり、施設やイベント、団体などと行政の状況を把握し、文教大学および学生が参画したり提案したりする可能性を検討した。調査は足立区シティプロモーション課およびスポーツ振興課へのヒアリング(2019年12月17日)と現地調査(2020年1月4日：大学周辺、2月2日：障害者スポーツフェスティバル)、文献調査である。本来は複数回にわたる調査を実施する予定であったが、新型コロナウイルスの感染拡大の影響により調査は途上にある。

#### 3-3. 把握した「あだち」情報

##### (1) 足立区のスポーツ行政と推進計画

足立区のスポーツ行政は、地域のちから推進部スポーツ振興課がおもに担当しており、課内には、振興係とスポーツ支援係、生涯スポーツ担当係がある。このほかに、文化・読書・スポーツ計画担当課長が同計画の策定と進捗管理を担っている。

足立区文化・読書・スポーツ分野計画は2020年2月に策定され、2025年度までの6年間を計画期間としている。従来の「足立区文化芸術振興基本計画」「足立区図書館計画」「足立区子ども読書活動推進計画」「足立区生涯スポーツ振興計画」を一体化し策定したもので、「足立区文化芸術推進計画」と「足立区読書活動推進計画」「足立区運動・スポーツ推進計画」の3つの計画から構成されている。「足立区運動・スポーツ推進計画」では、現状の課題を「区民のスポーツ実施率が低い」ととし、具体的に、①「子どもの年齢が上がるにつれ、スポーツ実施率が下がっている」、②「成人のス

5 レイ・オルデンバーグ(忠平美幸訳)(2013)『サードプレイス：コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』みすず書房

6 内閣府(2020)「新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査」

スポーツ実施率が低い」、③「障がい者のスポーツ実施率が低い」の3つを挙げている。そして、57の事業と目標値を定めている。これらの中で、文教大学が貢献できそうな事業としては、「運動・スポーツを気軽に楽しむための機会づくり」として、スポーツ教室やイベントの開催が考えられる。そして、「運動・スポーツの楽しみを深める場の提供」として、大学の運動施設の開放が考えられる。さらに、「運動・スポーツをささえる人材の育成と活動の場の創出」として、スポーツボランティアやあだちこどもサポーター養成講座などの情報を学生に提供し、勧奨することができる。

筆者がヒアリングした足立区シティプロモーション課の浅野喜之・大学連携担当係長によると「区民を対象としたいくつかのアンケートの自由記述回答には、子どもを大学生と交流させたいという要望が多く見られた」とのことであった。スポーツを通して交流し、地域貢献することが可能である。

## (2) スポーツ施設

区の主要なスポーツ施設としては、総合スポーツセンター(東保木間)や平野運動場(平野)、スイムスポーツセンター(西保木間)などがあり、各地に野球場(12か所)、テニスコート(6か所)、運動場(6か所)がある。さらに、9カ所の地域学習センターには地域体育館がある(花畑には花畑地域体育館がある)。しかし、区民のニーズに応えるのには十分ではなく、スポーツ振興課の高橋俊哉課長によると「約105の小中学校が施設開放しているが、スポーツ団体は約1,400あり、利用回数は週1回までで、新たに活動したい区民の利用が困難な状況にある」という。スポーツを楽しむ場の提供が必要であり、足立区運動・スポーツ推進計画では「民間のスポーツ施設など他の活動場所の利用促進を図っていく必要があります。」<sup>7</sup>としている。

## (3) スポーツイベント

スポーツイベントも多数開かれており、2019年度のを下表に示す。プロスポーツや選手権大会のようにハイパフォーマンスのものから幼児を対象にしたものまで幅広い。特に、2月と3月は障害者スポーツ推進月間として、集中的にイベントを開催している。

表 2019年度スポーツイベント一覧

開催月	イベント名	内容
6月	ジャイアンツアカデミー足立親子野球教室	未就学児とその保護者を対象とした野球イベント
8月	3×3. EXE PREMIER 2019 in 足立	3人制プロバスケットボールのリーグ戦 (会場: 東京電機大学)
8月	SOMPO ボールゲームフェスタ 2019 in 足立	小学生を対象とした体験イベント
10月	スポーツカーニバル 2019	区内の各所で行う各競技のイベント (台風のため中止)
10月	タータルマラソン国際大会 兼 バリアフリータートルマラソン in 足立	障害の有無を問わないマラソン大会 (台風のため中止)
11月	マネードクター 2019 日本ゴールボール選手権大会	
11月	関東女子フットサルリーグ in 足立	
12月	関東社会人・関東大学バスケットボール	男女のオールスターゲーム
2月	障害者パドミントン交流大会	
2月	障害者スポーツフェスティバル in あだち	複数の競技の体験やデモンストレーション
2月	東京都車いすバスケットボール選手権大会	
3月	全国スペシャルトランポリン交流大会	

7 「足立区運動・スポーツ推進計画」p.17

日常的に開催しているイベントで特徴的なものとして、「パークで筋トレ」がある。区内の30の公園で定期的で開催され、筋トレやウォーキングなどを行うイベントである。文教大学に隣接する花畑公園では、65歳以上を対象として毎週土曜日10時～11時に開催されている(写真5参照)。

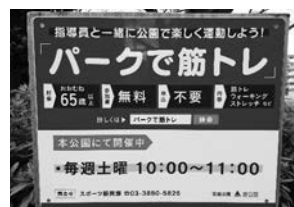


写真5 公園内の告知板

#### (4) 総合型地域スポーツクラブと市民団体

総合型地域スポーツクラブは、国が1995年より推進しているスポーツ振興施策の1つである。従来のスポーツ団体は単種目で特定の年代を対象にしたものが多いが、これは、幅広い年代を対象とし、複数のスポーツに触れる機会を提供する、地域密着型のスポーツクラブである。足立区には9つのクラブが設立されているが、花畑地区にはまだ設立されていない。花畑地区は特別支援学校などもあるので、障害者スポーツのクラブができないか期待されている。

### 3-4. ともに学び、研究する

以上の調査から、スポーツ関連の地域イベントに学生が参加し、街の活性化に寄与できそうなこととして、以下のようなことが考えられる。

#### (1) 総合型地域スポーツクラブの創設

文教大学では、体育館(バスケットボールコート2面、卓球8台)とテニスコート(3面)、グラウンド(フットサルコート2面)を有しているが、体育の授業が少ないので、日中にはスポーツ施設がほとんど利用されていない。一方、足立区では上述したように施設の利用率が高く、スポーツ団体のニーズに応えられていない。そして、花畑地区には総合型地域スポーツクラブがなく、障害者スポーツのクラブができないか期待されていることから、大学を拠点とするクラブを創設し、その運営に学生を参画させることが考えられる。国際学部や経営学部の学生にとってインターンシップの良い機会となろう。

#### (2) 部活動指導員の養成

教員の働き方改革の一環で、文部科学省は2017年度より部活動指導員制度を導入している。しかし、なり手が少なく、苦慮しており、大学生に期待がかかっているが、部活動指導する知識と技能が備わっているか不安である。そこで、大学の授業で部活動指導員を養成し、教育委員会に採用してもらうスキームを作れるか検討したい。文教大学では、「スポーツ科学」(2単位)と「健康科学」(1単位)の単位を修得すれば、日本スポーツ協会の公認スポーツ指導者資格の受験資格が得られる。この資格があれば、運動部ではあるが部活動指導員としての資質を身につけたと判断できる。

## 4. 「多言語・多文化共生」にもとづく学び

### 4-1. あだち学の構築に向けた筆者のアプローチ

筆者(渡邊)は、文化人類学、およびそれに軸を置いた地域研究を専門としている。本論考の趣旨に、文化人類学の3つの柱があるフィールドワーク、全体論、文化相対主義が関連する。まず、フィールドワークとは、地域の郷土資料館における文献研究なども含まれるが、外部者が地域社会



に入り込み、そこに長く滞在または関与するなかで、日常の不可分領域と呼ばれる些末な事象をもとらえようとする参与観察や聞き取りを指す。フィールドワークを通して、地域の文脈から物事を理解する目を持つことと、一方では、観察者の育ってきた「外部」の目を持ちながら、対象を客観的に理解することを目指す。全体論とは、地域を研究する方法であり、その歴史的経緯と地域を取り巻く大きな社会や周辺地域との関係性の上で総合的に理解するという姿勢である。時間軸や空間軸を用いながら、地域の現在の理解を深めていく。文化相対主義とは、自他の文化を善悪や優劣といった自文化中心主義的尺度ではなく、同列にみるという倫理的姿勢である。「あだち学」のなかでも「多言語・多文化共生」をテーマにしたときに表出する、他者への「憐憫」の視点ではなく、共に生きていく、互酬関係をいかに築くことができるかが重要となる。

#### 4-2. 調査の視点と手法

本学学生が足立区における多言語・多文化共生の現場においてどのような調査や活動ができるだろうか。その可能性を考えるために、筆者は、外国人人口についての基礎的情報に関する文献調査のほか、日本語教室、外国につながる子どもたちの居場所づくり、多言語防災、および地域の魅力を外国人観光客に伝えるローカル・サポーターの4つに焦点を当て、情報収集を行った。

調査手法は、まず区内のNPOを知るために、足立区NPO活動支援センターおよび区民参画推進課を訪問して(2018年6月22日)NPOのリストを入手したあと、日本語教室にて参与観察と聞き取りを行い(同年6月29日、11月7日)、日本国籍を取得した利用者への聞き取りを実施した(7月24日)。区内で子どもの支援活動を行っているNPO(2019年10月30日、11月15日)に対し、取り組みと学生の活動の可能性について伺った。また、市シティプロモーション課(2019年10月30日)と危機管理部災害対策課(11月15日)を訪問し、外国人をめぐる防災の取り組みについて聞き取りを実施した。地域の魅力を外国人観光客に伝えるローカル・サポーターについても、それを実施している宿泊施設を訪問(2020年1月24日)し、代表取締役および担当者に対して聞き取りを行った。日本語教室を除いてフィールドワークは聞き取りに終始しており、地域における参与観察には至っていない。

#### 4-3. From: 把握した「あだち」情報

足立区は、新宿区、江戸川区に次いで東京都内の在住外国人が多い。2020年1月1日現在で、34,040人おり、その数は毎年数百人程度の転入超過傾向が続いている<sup>8</sup>。足立区が都内で3番目に外国人定住人口が多い理由は、近隣に工業団地があること、比較的物価が安いことが挙げられよう。なお、足立区平成27年国勢調査によれば、国籍で多いのは上から順に中国、韓国・朝鮮、フィリピン、タイ、インドネシア、ベトナムであり、上位3か国で外国人人口の85%を占める<sup>9</sup>。同統計を男女別にみると、中国とフィリピンで女性が男性を大きく上回る。これは、外国人女性と日本人男性の組み合わせの国際結婚世帯が一定数あることを示唆している。また、外国人の職業においては、専門的・技術的職業者が14%近く、サービス職業従事者が12%、生産工程従事者が10%である。こ

8 足立区ホームページ「足立区の年齢3区分別人口(平成25年以降)」

<https://www.city.adachi.tokyo.jp/koseki/ku/aramashi/toke-nenre-3kubun300102.html> (最終閲覧2020年11月9日)

9 足立区ホームページ「足立区平成27年度国勢調査結果報告書」

<https://www.city.adachi.tokyo.jp/documents/4935/kokuseicityousakekkahoukoku27.pdf> (最終閲覧2020年11月9日)

ここには、近年増えている中国、インドネシアやベトナムからの短期滞在型の技能実習生も含まれる。

足立区役所では、外国人に対する支援に関して、次に取り上げる日本語ボランティアグループ教室のほかに、国籍ごとの自助グループもあることを指摘している。3番目に人口の多いフィリピン人は、カトリック教会を中心にネットワークが形成されており、そのなかで助け合いが行われている。在住中国人においては、同郷ネットワークの互助がある。一方、技能実習生は同国籍の定住外国人との連携はほとんどみられず、受入企業が管理している。このため、区ですら状況の把握が難しいという。

### (1) 日本語ボランティアグループ教室

区には2020年10月12日現在、16の日本語ボランティアグループ教室(以後、日本語教室と略)が区の地域調整課多文化共生担当に登録されている(うち、5つは「休業中」である)<sup>10</sup>。地域は梅田、綾瀬、新田、西新井、千住、日出町、六町、竹ノ塚、舎人、東和と、広範に位置している。それぞれ週に1度、2時間ほど実施しており、月曜日から日曜日までさまざまである。筆者が参与観察を実施した教室では、10名のボランティアと10名の受講者がおり、受講者の出身国は中国、韓国、フィリピン、メキシコなど様々であった。受講者のなかには、日本に来たばかりで履歴書の書き方を教えてもらっている者や、日本語検定試験の勉強をしている者、スーパーマーケットのチラシの読み方を教えてもらっている者もいた。また、訪問した日はちょうど七夕のパーティも行っていた。これらから、同教室は、単に日本語の習得をめざす場所ではなく、日本での働き方や生活の仕方、慣習を学び、仲間意識を形成する場となっていることが伺える。

### (2) 外国につながる子どもの学習支援・居場所づくりのNPO

本NPOは、外国につながる子どものみを対象として学習支援や居場所づくりをしているのではなく、区内中学校から紹介を受けた貧困にある子どもたちを対象としている。そのなかには、一定数の外国につながる子どもたちがいる。同NPOは足立区において3つの支部を有し、うち1つは、本学東京あだちキャンパスの最寄り駅である竹ノ塚駅に近い。裨益者となる生徒は2019年11月時点で約50人いた。同NPOは、平日は子どもたちが放課後に来る午後から夜にかけて開いており、週末は昼間に開室している。ここでは、生徒個人個人の事情に合わせ、机に向かうということを習慣づけたり、分からない部分を学習することで諦める可能性もあった高校進学のを志したりするほか、温かい夕食をみなで調理して食べることで心の安定と健康な身体づくり、仲間意識を持つことを目指している。とりわけ、外国につながる生徒たちの親のなかには、日本の受験制度を経験しておらず、日本の学校での学習内容も分からない人もいる。そもそも日本語読解能力において子どもの方が優れている場合もある。さらには、親が仕事等に勤しみ、家庭にあまりいないこともある。こうした理由により、親は我が子の学習の手助けをすることがあまりできない。そのため、本NPOは外国につながる子どもたちにとっても大きな一助となっている。

### (3) 地域防災と外国人の参画

近年、異常気象により、地震による災害よりも大雨洪水による水害が深刻になりつつある。足立

10 足立区ホームページ「足立区日本語ボランティアグループ教室一覧」

<https://www.city.adachi.tokyo.jp/documents/1426/21105japanese.pdf> (最終閲覧 2020年11月9日)

区においては、区の公式ツイッターを使って防災速報を流しているが、ここ数年は、区のホームページと同様に、速報情報の多言語化も図っている。とはいえ、日本語の内容が正確に訳される必要があり、通訳ボランティアの力を借りるためにタイムラグが生じることは否めない。

他方、区は、区内を全区域単位、13のブロック単位、100以上の住区単位の3つのレベルに分け、防災に取り組んでいる。区内にある小中学校106校を避難所として指定しており、その運営母体として避難民運営協議会がある。これは町内会と重複するところもあり、定例会のなかで避難所運営や防災訓練のほか、孤立しやすい高齢者を含めた絆づくりが目指されている。こうしてみたとき、地域において必ずしも定住外国人は災害弱者として見なされていないことがわかった。

#### (4) 地域の魅力を外国人観光客に伝えるローカル・サポーター

これまでの内容は、定住外国人を対象にしたものであるが、訪日外国人観光客を対象にしたものもある。区内の西新井には、欧米の旅行客が平均して2～3日ほど泊まるホステルがあり、彼らを対象にした特徴的な企画を実施している。例えば付近の西新井大師参拝ツアー、酒場めぐりツアー、地域の昼職人を招いたミニ昼づくりや書道家による書道のワークショップ、花札を楽しむゲームナイトといった会合などが、ほぼ毎日のように開催される。こうしたイベントは、ゲストが求めるだろうものをホステル側が提供するのではなく、ホステル側がよいと考えたもの、スタッフ(同社ではコネクターと呼ぶ)が得意なこと、趣味にしていること、伝手のあるもの、そして地域の方々からローカル・サポーターという形で登録して企画立案したものが実施されている。ワークショップやツアーには、地域や一般の方も参加できるが、料金については、ゲストと一般とで分けている。

こうした地元に着目した「コア」な文化体験は、来日ゲストたちが旅行中になかなか経験できるものではない。また、足立区住民の自己肯定感は総じて低いといわれるなか、地域に埋もれている専門的技術を持った人たちに再びスポットライトを当てることによって、地域の人たちが自分たちの住む足立区の魅力に再度気づいてもらうといったねらいもあるだろう。

#### 4-4. For:「あだち学」へのヒント

冒頭で記したように、「あだち学」は、体験的・実践的学びにもとづく大学と地域の相乗効果をとまなう体系を想定している。「多言語・多文化共生」においても、異なる言語や文化的背景を持つ人びとも既存の地域社会の重要なアクターとなることを目指す。フィールドワーク、全体論、文化相対主義などを用いた体験的・実践的学びのなかで、地域の多様な人びとの間を取り結び、その多様性を地域の特色もしくは豊かさとならえ、公正で新しいつながりを形づくるさまの一助となることを試みる。

また、その過程において、サービス・ラーニングの考え方が役に立つ。サービス・ラーニングとは、「教室で学ばれた学問的な知識・技能を、地域社会の諸課題を解決するために組織された社会的活動に生かすことを通して、市民的責任や社会的役割を感じ取ってもらうことを目的とした教育方法」であり<sup>11</sup>、一定期間の活動のなかで課題の当事者や実務者とともに解決方法を探し、変化(課題解決や改善)に向けて実践していく。これは、学生と学問的学びと地域との関わりを融合させることを意図した教育理論であり、大学(教員)と学生、地域社会の3者間の相互かつ双方向に有益な

11 筑波大学ホームページ「サービス・ラーニングの定義・歴史・役割」

[http://www.human.tsukuba.ac.jp/gakugun\\_bk/k-pro/aboutSL/aboutSL.html](http://www.human.tsukuba.ac.jp/gakugun_bk/k-pro/aboutSL/aboutSL.html) (最終閲覧 2020年11月9日)

パートナーシップにもとづいている。このため、学生や大学(教員)、多様な地域社会は互いに「教える側」であり「教えられる側」ともなるといった互酬的關係を有する。煩わしさや労力の投入が求められるだろうが、時間をかけた関係の構築が、地域の自己肯定感の向上、大学や学生の地域に対する愛着や誇りにつながることを期待する。

#### 4-5. With : とともに学び、研究する

以上の調査と志向から、多言語・多文化共生などの地域の取り組みにおいて学生が参与しうることとして、次のようなことが考えられる。

##### (1) 日本語教室のボランティア

授業外の時間において、学生たちは、日本語教室でボランティアをすることができる。特に、将来、日本語教師をめざそうという学生は、日本語教師になるための授業を履修する傍ら、こうした日本語教室で経験を積むことができる。

また、足立区には外国人生徒と住民をつなぐコーディネータ制度はないが、英語や中国語が得意な学生には、区役所通訳ボランティアとしても活動するなかで、地域の外国人が抱える困難を知っていくことも可能である。そうした困難は、国籍や性別、在留資格、世帯構成、居住環境などによって異なりうるため、より丁寧な対処が必要であることに気づくだろう。

他方で、こうした通訳ボランティアをする人のなかには、定住外国人や日本国籍を取得した人もいる。かれらが被援助者としてではなく、一区民として地域に貢献し、地域を支える網の目に入り込んでいるさまをみていくと、21世紀の日本における多文化共生はどうあるべきかと考えることにつながっていく。

##### (2) 子どもの学習支援・居場所づくりのボランティア

当該NPOにとって、大学生は、生徒の親でもなく同級の友人でもない「ナナメの関係」にあり、悩みを相談したり「大学生」という進路上のモデルとなりうる存在である。これらの生徒たちが集まる支部が大学キャンパスに近い立地にあることから、学習支援や食事作りなどを行うボランティアや、運営に携わるインターンとしても大きく期待されている。現在、他大学から参加しているボランティアのなかには、ダブル(両親が国際結婚者)の人もおり、自らの持つ外国語スキルを披露したり、自身がつながる国の社会や文化について紹介する企画を実施したりしている。国際学部にもそうした背景を持つ学生や、他国からの留学生もいる。彼ら自身が本NPOで活躍することで、それが子どもたちに活力を与える可能性もあるだろう。

##### (3) 高齢化・外国人化の進む花畑団地における地域防災

定住外国人を含めた地域防災においては、避難所運営や防災訓練、多文化共生の点から、団地のような集合住宅の方が、戸建てに住む人びとに比べて普段から密接な付き合いをしていたり、災害時においても協力体制が求められる。それには、比較的独立した暮らしを営む戸建ての住民に比して、団地に暮らす外国人は、ゴミ出しや回覧板、町内会運営等で他の世帯と連携することが求められるからだ。これは、地震等による避難時においても同様である。団地長もしくは団地の防災担当者が各部屋の住人がきちんと避難したかどうかを確認する必要がある。このため、部屋の住民は自身の避難状況について意思表示をしなければならぬが、団地の運営にあまり関わらない住民にはうまく伝わらな

いだろう。したがって、普段からの団体内での住民間の交流、すなわち多文化共生の実践を通して、防災を進めていく必要がある。学生が避難民運営協議会等にオブザーバーとして参加していくなかで、両者の橋渡しや、協議会自体の運営のサポートにまわることも将来的に可能である。

#### (4) ローカル・サポーターとしての手伝い

ローカル・サポーター制度は、足立区役所が主催する2日間の「おもてなし講座」の修了者が上記ホステルに登録してもらうことができるような仕組みになっている。2020年1月時点で、ローカル・サポーター登録者は497人おり、年齢は10代から60代くらいまで幅広く、主婦や仕事をしている人、シニアもいる。

ところが、ツアーをつくる際には、地域の方とやりとりをしながら実現させていくなど、なかには事前準備に10時間ほどかかるものもあるなど、とても骨が折れる作業である。しかも、それは有償ではない。地域のことを知らなかったり、ゲストの要望をきくことだけがおもてなしだと思ってしまう人は、長続きせず辞めてしまうために、ツアーやワークショップが継続しないことが課題となっている。また、ゲストは少人数で若者が多いにも関わらず、若者向けのツアーやワークショップがまだそれほど出されていない。そのため、学生らがローカル・サポーターに登録し、地域のことを学びつつツアーを企画したり、ワークショップに来て通訳などの補助をすることが期待されている。

## 5. 「市民参加とまちづくり」にもとづく学び

### 5-1. アプローチ：市民参加のまちづくりへの学生関与(意義と課題)

市民参加のまちづくりを方法論的に論じることは、行政計画型のまちづくり結果との対比から、依然として重要な意味を持っている<sup>12</sup>。とりわけ、自らの「まち」の姿は自分たちで決めたいとする市民側の希望にとどまらず、地域住民に納得してもらう計画作りにおいても、自治体からの期待は大きいものがある。

この過程においては、自治体の試行錯誤も見られる。たとえば、都市マスタープラン作りにおいては、市民参加の実態が確認できる<sup>13</sup>。また、近年の「シティプロモーション」活動やそれを担当する自治体のセクション(たとえば、シティプロモーション課)の設置の動きから、そのまちならではの「魅力を再発見し、持続して発展させるため、国内外に効果的に発信していく取り組み」を推進している<sup>14</sup>。シティプロモーションのために、市民参加型の会議体をつくって、協議による活動展開を進めている自治体もある<sup>15</sup>。「市民」の「参加」は、可能性であるとともに、実態でもある。

地域社会、とくに、自治体の側がこのような「参加」の枠組みを形成して「市民」に期待しているならば、その招待を受け、自発性を発揮することを期待されている「市民」の側でも、誰が、いつ、どこで、どのような「参加」による地域貢献ができるか、可能性の検討が必要である。この可能性のう

12 堀川三郎(2017)「景観の保存と保全」(鳥越・帯谷編著『よくわかる環境社会学 第2版』ミネルヴァ書房 所収)

13 茅ヶ崎市「ちがさき都市マスタープラン」(2019)

14 足立区ホームページ

<https://www.city.adachi.tokyo.jp/hodo/ku/koho/citypromotion/index.html> (最終閲覧 2020年11月4日)

15 掛川市ホームページ

<http://www.city.kakegawa.shizuoka.jp/city/profile/kakegawapromotion.html> (最終閲覧 2020年11月4日)

ち、本学生の参加を想定した地域への影響と、学生への体験的な蓄積について、自治体へのヒアリングにもとづき、検討・考察する。

## 5-2. From：本節における足立区の現状紹介

市民参加とまちづくりの事例について、足立区政策経営部協働・協創推進担当課、同シティプロモーション課に聞いた。以下、そのヒアリング・データを要約して記載する。

### (1) 地域の構成と特徴

足立区(花畑地区も含む)の住民／市民の特徴としては、1958(昭和33)年から始まる団地造成(区内第1号は西新井第一団地)の歴史と重ねて説明されることが多い(足立区HP)。つまり、「団地住民」としての特徴が、同区や区民の特徴を表すフレーズとして多用されている。「団地による区域の構成」が、人が集まるきっかけとなったため、区の発展・成長当時から団地住民が多く、加えて、「永住意識が強い傾向」にあったという。

その後、時間経過とともに、足立区全体で「古い団地」化が進んだ。中でも花畑では、入居開始は1964(昭和39)年で、古い低層団地が残ったことで、(足立区内の他地区と比較して)「地区内に高層建築が少ない」状況となった。また、地域住民の構成上の特徴も、時間経過の影響を受けた。足立区全体が「団地住まいの核家族の区」であったがゆえに、「やがて子どもが転出し、転入が減少する」地区が増えていったという。

花畑地区も例外ではなかった。ここは現在、「ホワイトカラーのシニア層が中心」の地区となり、いわゆる「子ども転出後のまち」を現状とするその「典型的な地区といえる」とのことである。区内でも「高齢化が顕著」で、「花畑に足立区初の『特養』」ができたのは、その証左だと説明があった。また、かねてから区内でも、「交通遠隔地」で移動がやや不便であるという認識があったそうだ。足立区側からみると、東武線の竹の塚駅からアクセスできる。ただし、多くの人はバスを使うことになる。埼玉県側には谷塚駅があり、また、TX 開通により六町駅ができたが、駅が近く便利な地域という実感は少ないとのことだった。

しかし(というべきか、それゆえというべきか)、地域の「人間関係は緊密さが残って」いて、花畑ならではの協力関係があるという。たとえば、「盆踊りが存続」しており、それは今でも「団地と地域で運営」するものとされており、「住民の集まりの機会」になっているらしい。

地域組織の特徴も同様だそうだ。自治会組織は存続しているが、メンバーは「高齢化している」という。地区によっては、「70代中心」の自治会組織もあるらしい。他方で、近年では、地縁組織以外の事例も確認できるという。それは、「スポーツ系の目的縁」をいかした人々のつながりである。これらの事情を総合すれば、「自治会組織は強く」、「コミュニティ力は強く」、それゆえ、「区の依頼も多い」(区から地域に依頼する事業等の多さ)のが花畑地区だということになると説明を受けた。

こうした、人々の結びつきが維持されている花畑であるが、その一方で、ホワイトカラー層が多く住む場所としては、地区内に「アカデミック」と形容することができるような特徴や施設が「弱い(少ない)」と見られる傾向が続いていたという。それゆえ、住民目線でも「学問的な地域としての特色が弱い」と感じられており、「学びの機会が少ない」と受け止められてきたそうである。もちろん、こうした住民目線評価は固定的なものではなく、あくまでも傾向を表現したものであるが、それゆえ、文教大学の新キャンパス構想は、とても「好意的に、期待感をもって受け止められている」との認識であるとの説明を聞いた。

## (2) 足立区の地域政策

足立区の特徴の1つは、「足立区流のシティプロモーション」である。ねらいは、「区民一人ひとりが、今よりもっと『あだち』を好きになる。その想いが区外にじわじわと伝わって『あだちっていいね!』と言われるまちに。そのプラスのスパイラルが、さらなる誇りにつながっていく」ことであり、「誇りの持てるまち」が目標である。

プロモーションには、3つの具体案を掲げている。「磨くプロモーション」、「創るプロモーション」、「つなぐプロモーション」である。また、本学を含む「大学連携事業」もプロモーションの一環とされている。大学の地域参加は、足立区流シティプロモーションの仕組みと動向にヒントを得ることができる。

また、本学の行政との連携作りは、エリアデザイン計画とも連動可能である。足立区は、区の「北部地域」として、花畑地区を「まちづくりの拠点化」事業の1つに加えている。「2019年 足立区職員採用案内&区政要覧」によれば、エリアデザイン計画として7拠点を掲げている。このターゲットは、「まちの特徴・魅力や求めるべき将来像などをエリアデザインとして、区内外に広く発信することで、足立区のイメージアップや、地域の活性化を図る新しいまちづくりの取り組み」であり、「大規模な区有地等を活用し、民間活力によるまちの整備を積極的に進めてまいります」と紹介されている。

これらを支える自治体の仕組みとして、足立区は「共生・協創社会の仕組みづくり」を導入している。この協創プロジェクトは、「区民の自主プロジェクト」だと説明されている。「何ができるか、区民が考える」ことを目指すものだという。たとえば、「地元の人たちと区役所がともに語りながら考えていくスタイル」を想定している。このとき、区役所の位置づけは、「区民が困ったときに、何か言ってもらえる場所」という考え方だという。区民の自主性をどのように育て、どのように発揮してもらるか、これが課題として設定されている。同区HPで、区長は、「協創」を次のように説明する。「『協創』とは『協働』の発展形」であり、「当初の想定からいい意味で事業範囲が拡大・発展し、地域課題の解決に多大な貢献を果たして」いる事業をさすものという考え方である。また、「民と民の関係もあり得る(区内の信用金庫と大学とのコラボによる地元企業支援活動はその一例です)わけで、従来になかった新しいネットワークこそ、「協創」の醍醐(だいご)味と言えます」との説明もある。

しかし、同区担当者によれば、「花畑には協創のプレーヤーが少なく、また、NPOも少ない」のが現状だという。もっとも、同地区内には「ビオトープ団体がある」が、「地区住民ではない参加者が多く」、地域の担い手をどうするかは解決すべき課題となっている。

協創のプレーヤーが必要とされている理由も明快である。なぜなら、公共としての「インフラ問題」の改善が、足立区内での共通の案件の1つとなっているからだという。とくに注視すべきは、過去の「住宅整備」事業から、現在のまちづくりへの転換である。すでに述べた「低層住宅集約」型の団地造成が花畑では問題になっており、高齢化や子ども世代の流出によって次第に「土地あまり」が生じている。したがって、これを「どう使うか」が問題の中心である。当然ながら、足立区の目線は積極的で、これを「これからの課題であり、楽しみな課題」と考えているそうである。国際学部生の「参加」は、こうした協創の取り組みの全体にたいして、可能性を有するものと考えられる。

### 5-3. For: あだち学へのヒント——関与の可能性分析

上記の現状をふまえると、現在の足立区における市民活動の「これから」にたいしては、学生の関与を検討する余地が十分にある。区の担当者が想定する協創の事業においても、「昔はただ要求す

る」、「これがほしい」と言うだけの「市民像」から脱却し、市民と自治体がともに「まち」を形成する機運の高まりが感じられる。とくに近年、「NPOとしてここまでできるので、区はこれをやってほしい」というタイプの活動が増えており、それぞれの持ち味を活かした地域活動の展開が、ますます期待できるようになったという。したがって、「NPOを支援するNPO、または、そのような団体が区内にいてほしい」と感じるようになったそうである。

このような機会に、大学連携と「参加」は、足立区の地域形成に一定程度以上の貢献を果たすことができるだろう。前例を見てみると、すでに東京電機大が区の支援をうけて「キャリアワークショップ」を開催し、地域課題の解決にむけたプロジェクトベースの取り組みを行っている。担当職員の話では、これにより、「まちの人と区の職員の会話が増え」ていることを指摘し、学生が地域のつなぎ役となり、コミュニケーションの潤滑油となっている点を成果と考えている。

#### 5-4. With：関与のカリキュラム——プログラムの可能性

そこで、当プロジェクトと足立区の連携では、「区民が見てわかるプログラム」を念頭におき、事前にその理念を示し、成果を重視した取り組みを展開することが求められる。事実、現在も、理念的な目標を有する大学の取り組みは少なく、実践的でわかりやすい取り組みがやや多い状況だという。とすれば、地域課題に関連する住民と学生の「交流会」、地域に存在する「団体間の話し合い」プログラム、地域特有の「課題」を「解決するための意見交換」プロジェクトなどの企画や運営、評価を検討することが可能である。

たとえば、花畑地区では、「世代間交流プログラム」、「世代別の意見聞き取り」、「三世代交流型ワークショップ」などの企画・運営・報告・評価を、学生が主体となっており、とりくむプロジェクトは、すでに地元での期待感が高まっているという。他方で、区の「協創」プロジェクトに掲げられている「足立区に誇りを持つ人の増加プロジェクト」への参加、協力も大いに可能性がある。

より具体的には、テーマを「あだちを語る人の増加策」や、「住んでみたいと思われる区へ」の提案として設定し、地区住民と学生が語り合い、意見交換結果をとりまとめるなどのアクション・リサーチに、可能性がありそうである。また、同区の地域の力推進部との連携を通じて、プロジェクトをまさに「協創」することもできそうである。そのためには、区が「必要とする要素」を把握するヒアリング型の実習、「区の宣伝や紹介」を行う広報型のアウトプット・プログラム、「区の課題抽出」を目指すワークショップ型の実習、「区の課題解決」を提案するコンサルティング型の実習や報告会なども想定し、区の要望に応じつつセットする、体験型の講義・演習の設計も実現できるかもしれない。さらには、「地域学習センター」が地区の「文化の拠点」でもあり、ここと連携すればとりくむテーマが見つかるであろうし、そこからたとえば「高齢者中心の地域と文化」を、学生目線を交えて構想するといった地域プロジェクトも設定が可能となるであろう。

## 6. 本稿の含意

このように、本プロジェクトは、学生の関与や参加の観点を手がかりに、地域と大学生との協働・協創による足立区への貢献を検討しようとした。本稿は、その事例報告の形をとった。そして、事例調査から見えてきたことは、プロジェクト・マネジメント(とその関連科目)を土台とした、学生と地区住民の実践、ならびに、理論的総括との融合が、地域にとっても、国際学部生にとっても有益な連携方法であり、同時に、今後のカリキュラム構築にも役立つ仕組みだと考えられ



る点であった。また、5節にて示された通り、将来的には足立区の施策推進過程との連携を取り入れつつ、市民参加のまちづくりを構想することも1つの可能性と考えることができた。

足立区での実習項目としては、地区住民の参加を前提とするワークショップ、話し合いの場(たとえば、市民討議会)の設定可能性が高いことがわかった。このことから、幅の広い意味での「話し合いの場」を「設計、実施、評価」できる学生、区職員、市民の育成を目指すような協働型の実習科目が、地域との整合性、地域課題解決や地域形成への妥当性を持つと考えられる。したがって、学生が、ファシリテーションの意義、利点、方法を理解し、実践できること、さらには、これら参加の場の企画、運営、評価、報告する能力を高める教育が必要だと思われる。

次に、「参加から考えるあだち学」の当面のゴールとして、「暮らしやすいコミュニティの作り方」がセットできそうである。たとえば、ワークや話し合いを通じて形成する地域内の「一体感(市民プライド)」が強く求められる区であるため、その醸成や向上を目標値として設定することができる。つまり、その一体感を作り出す方法や、適切な仕組みを構築するための検討が、理論的に追求されることとなるだろう。

仮に、「国際学部のあだち学」という枠組を想定すれば、地域課題の発見、聴取、抽出を通じて、地域の望ましい方向性を導出する学びは、現在の世界が抱える地域課題やグローバル課題、あるいはグローバル領域として考えるべき課題の抽出、整理につながる。地域からとらえるあだち学ではあるが、同時に、グローバル領域へと接続される取り組みとしても設定可能である。いずれも、「わかりやすい」課題設定として、地域課題の見つけ方、わたしたちの課題の抽出といった切り口から学びをスタートできるのが利点と言える。

最後に、学生の成長に不可欠な論点を指摘する。それは、評価、報告をもとにしたまちづくり活動への貢献である。まちづくり活動の活性化を目指すとき、単発の取り組みでは活性化が持続せず、一過性のものでしかない。そこで、評価、報告をいかした連続的な学びの活動展開を欠かすことはできない。それには、まず、自治体の仕事、自治体の作業過程、自治体の施策といった実態を理解する必要がある。そして、話し合い活動を設定して地区住民の参加を促し、話し合い活動参加者の中から地域リーダーやコーディネータを発掘するなど、継続性を地域にもたらし取り組みが行われるべきであろう。このような学びを通して、これからの「あだち人」を概念化することができれば、同区への貢献となるはずである。

### <謝辞>

本稿は、2019年度の文教大学学長調整金を得て実施された。また、この調査プロジェクトを実施するにあたり、足立区シティプロモーション課には多大なる協力をしていただいた。同課の仲介を得て、同区関係各課や地域との接点を持つことができた。サポートに感謝申し上げる。

加えて、本プロジェクトをコーディネータの立場で支えてくれた柴田春菜さんにもお礼を伝えたい。今後の本学の「あだち学」を実現するならば、柴田さんのような立場のスタッフは重要である。研究経歴を有し、地域活動への参加実績があり、地域プロジェクトの企画経験がある人材は、さまざまな人を「つなぐ」ことができる意味で、「地元学/地域学」の展開には不可欠だと思われる。

### 参考文献・サイト

足立区(1997)「足立区洪水ハザードマップ保存版」

足立区「足立区運動・スポーツ推進計画」

足立区(2020)「広報あだち」(2020年2月12日号)

足立区教育委員会(1992)「ブックレット足立風土記⑧」

足立区(2015)「足立区平成27年度国勢調査結果報告書」

<https://www.city.adachi.tokyo.jp/documents/4935/kokuseicityousakekkahoukoku27.pdf> (最終閲覧2020年11月9日)

足立区ホームページ「足立区の年齢3区分別人口(平成25年以降)」

<https://www.city.adachi.tokyo.jp/koseki/ku/aramashi/toke-nenre-3kubun300102.html> (最終閲覧2020年11月9日)

足立区ホームページ「足立区日本語ボランティアグループ教室一覧」

<https://www.city.adachi.tokyo.jp/documents/1426/21105japanese.pdf> (最終閲覧2020年11月9日)

足立区ホームページ

<https://www.city.adachi.tokyo.jp/hodo/ku/koho/citypromotion/index.html> (最終閲覧2020年11月4日)

掛川市ホームページ

<http://www.city.kakegawa.shizuoka.jp/city/profile/kakegawapromotion.html> (最終閲覧2020年11月4日)

茅ヶ崎市「ちがさき都市マスタープラン」(2019)

筑波大学ホームページ「サービス・ラーニングの定義・歴史・役割」

[http://www.human.tsukuba.ac.jp/gakugun\\_bk/k-pro/aboutSL/aboutSL.html](http://www.human.tsukuba.ac.jp/gakugun_bk/k-pro/aboutSL/aboutSL.html) (最終閲覧2020年11月9日)

東京都(1996)「利根川水系 中川・綾瀬川圏域河川整備計画(東京都管理区間)」

東京都土木技術支援・人材育成センター「東京の地盤(GIS版)」

<http://doboku.metro.tokyo.jp/start/03-jyohou/geo-web/00-index.html>

内閣府(2020)「新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査」

堀川三郎(2017)「景観の保存と保全」(鳥越・帯谷編著『よくわかる環境社会学 第2版』ミネルヴァ書房 所収)

牧瀬稔・読売広告社ひとまちみらい研究センター編著(2019)『シティプロモーションとシビックプライド事業の実践』東京法令出版

吉本哲郎(2008)『地元学をはじめよう』岩波ジュニア新書609, 岩波書店

レイ・オルデンバーグ(忠平美幸訳)(2013)『サードプレイス:コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』みすず書房